視点2

# 保育をめぐる葛藤について

湯浅周子
（教員）

私たちは、コミュニケーションの表出が少ない、または表出内容が拙い子どもについて、内的な成長も同程度なのだと誤解しがちではないでしょうか。言葉や身振りの応答で大人自身の働き掛けが伝わっているという感覚が持てないと、気持ちが通じ合っているという実感を持ちづらいことが大きく影響していると思います。

子どもは、目線の動きや身体の力の入れ方、かすかな表現、もしくは「表現しない」ということで自分の意志を表しています。本人もまだ自覚できていないような心の動きも表れることがあります。そばにいる大人が敏感に感じ取り、表現として受けとめ、つないでいくことで、子どもは自信を持って自分を表現するようになっていくと信じて、私は日々子どもたちと向き合っています。

子どもと時間を一緒に過ごしていると、「これだ」という瞬間に出会うことがあります。今まで積み重ねてきた出来事や関係性など、さまざまなヒントが直感的につながって、子どもの表現していることの意味を捉えられたと感じる瞬間です。

「子どもはこう考えているらしい」ということを感じられたとき、それが自分の想像を超

湯浅周子（ゆあさしゅうこ）
愛育養護学校教諭。子どもたちや実習生、保護者、保育者と過ごす日々の中で、子どもをめぐるさまざまなことを考えています。私生活では、7歳、2歳の男児の母。

えていることが多くあります。そのたびに、感性を研ぎ澄まして向き合うことの大切さを思います。今回、A君の担任として過ごした二年間を振り返りながら、個人の感性に基づく直感的感覚をめぐる内なる葛藤について、自分の思うところを書きたいと思います。

A君は、小学校三年生の男の子です。一、二年生の時期に、私が担任していました。小学校に入るまでは集団生活をほとんど経験しておらず、他者とコミュニケーションをとることへの緊張がとても高いお子さんでした。好きな物語を繰り返したり、歌を歌ったりと、常に何か言葉を口にしてはいましたが、話し言葉を使ったやりとりはなかなか成立しませんでした。入学した頃は、音の出るおもちゃやキーボードの自動演奏を繰り返し操作し、音楽を聴き、歌う活動を中心に一日を過ごしていました。大人がそばにいて、繰り返しの中にある小さな変化を感じ、周囲とつなぐ日々の中で、A君はだんだんと自分の思っていることを行動で表現するようになっていきました。A君の持っている知識と現実世界の秩序が統合されてきて、安心できる居場所を得て、自分の好きなことを通して人とつながれる自信をつけてきたのだと感じます。

そんな日々を重ねて、二年生の二学期の頃、A君は、歌や物語などの引用ではない言葉を自分の言葉として使うようになってきました。自分の気持ちを言葉にして周囲に伝えることを、自分からやってみようとしています。

三学期に入ると、ままごとをしている友達の隣に座って頬を寄せたり、友達がごっこ遊びやレールのおもちゃを広げて活動している場に入って、その真ん中に座ったりすることが何回か見られました。少し離れて様子を見ていると、A君がしばらくして場を離れたり、何となく活動自体が収束に向かってしまったりします。友達が遊んでいる場に衝動的に入

り込んで、場を壊しているようにも見えるその行為が、実は一緒にやってみたい気持ちを表現しているのではないかということを、A君の内面的成長を考えると想像できました。A君の友達に向けた思いをどのように支え、周囲につなげていけるのか、チャンスを探しました。

ある朝、登校してきたA君は、毎朝座る小さな机ではなく、大きなテーブルセットに座り、ルーレットのおもちゃを触りながら、「さつまいも、１０００円！」と表現しました。私は瞬間的に、A君がルーレットのおもちゃをレジに見立てていると感じ、「一緒に遊ぼう」と伝えてくれていると感じました。この連想をもとに、「A君、お店屋さん、やってみたいの？」と聞くと、少し緊張した表情を見せます。やってみたい気持ちを持って緊張しているのだと感じました。私は、A君が「始めたい」と思っている気持ちを形にしようと、さっとおままごとの食べ物を皿に並べ、看板を作って、お店屋さんを作りました。そして、A君に「お客さんを呼んでこようか」と言いました。ルーレットを触っている様子から、このままやってみたい気持ちを持っていると感じ、私は、ホールで音楽を楽しんでいる子どもと大人数人に声を掛けに行きました。

「A君のお店屋さんが開店しました。お買い物に来てください！」。何人かの人が集まってきて、お店の前に列ができました。先頭のBさんが品物を選び始めます。A君はルーレットを触りながら、その様子を感じています。

「A君、イチゴとブロッコリーをください」とBさんが品物を選びました。A君は、ハンバーグを手に取ってルーレットに乗せ、値段を決めます。「１０００円！」。隣にいる私は「今日のA君のお薦めはハンバーグだそうです」と言いました。Bさんは「まあ、ハンバーグですか。A君、ありがとう。１０００円のハンバーグはおいしそうだわ」と続けます。

A君は、Bさんに渡す前にハンバーグを食べるまねをして「おいしいですか？　ありがとうございます！」とニコニコしながら言います。新しい活動が始まったドラマチックな瞬間でした。A君はハンバーグが大好きです。自分の好きな物を相手に差し出し一緒に味わう姿は、喜びにあふれていました。この後もお客さんが続き、お店屋さんは大繁盛でした。

実は、これらの行為には、A君が今お店屋さんをやりたいと願っているという前提を持っていなければ関連付けて考えられないような、かすかな表現も含まれています。大人が間に入り、物を並べたり、お客さんと言葉の説明でつないでいったり、A君の注意を引き戻したりしながらの遊びが展開して行く中で、A君は自信をつけて、活動を自分のものにしていきました。家に帰ってA君は「お客さんがたくさん来ました」「楽しくなかった。緊張した」「またやりたい」と表現したそうです。その後、お店屋さんごっこは、クラスを越えた活動の一つになっています。

A君との生活の中で、「自分の気持ちをわかってもらった」という子ども自身の実感が、こんなにも子どもを勇気づけ、生きる支えになるのだということを改めて感じます。大人が感じたかすかな表現を拾い上げていくこと、それを社会とつないでいくことで、子どもには「あなたのことをわかりたいと思ってそばにいる」というメッセージが伝わります。身体的、心理的な距離がすぐ近くにいないと感じ取れないようなかすかな表現を、直感的にくみ取り、社会とつないでいく大人として子どものそばにいるとき、子どもの行為の解釈について自分の独りよがりになってはいないかという葛藤はなくなりません。常に子どものそばにいて、無条件で子どもの味方であり続けるために、自分の行為について葛藤を抱えながらも、現実に向き合い続けることこそ大切なのだと考えています。